

## 尹 相軫（ウン サンジン）

韓国出身／2019～2020年度奨学生

日本体育大学 体育科学研究科 博士課程

### 1. 来日後の私

大学3年の1学期からヨーロッパの文化に直接触れるためにオーストリアに留学し、半年後、私は日本への留学を決めました。ヨーロッパの生活はとても楽しかったのですが、食べ物や文化、人々の考え方などが東洋とは違うことで、“経験として住んでみることはイイが長くは住みたくない”と思うようになりました。

考えた結果、西洋の文化にはあまり合わないと判断し、オーストリア留学直前に尋ねた日本という国が知りたく、大学院は日本へ行くことを決めました。そこから、毎日授業とバイトが終わってから日本語の勉強を始めました。最初はカタカナを覚えることに苦労し、少しずつ平仮名とカタカナに慣れてきたと思ったら、難関である漢字が待っていました。調べると、日本で住むだけであればそこまで漢字は必要とされていないと分かりましたが、大学院で研究をするためにはどうしても漢字になれる必要があると思い、毎日50個ずつを目標として、漢字を覚えました。1年間のオーストリア留学生活の間、最後のヨーロッパ旅行の2か月を除いて、約4か月の日本語勉強がとても役に立ったと考えております。オーストリアから帰国した後、日本留学のための貯金とともに、残り1学期の大学授業をこなしながら、外国人として一番高いレベルである日本語能力試験N1習得を目指しましたが、授業の課題とバイトでほとんど日本語の勉強をする時間を作ることができませんでした。運よく、ぎりぎりの成績でN1を習得し、大学卒業式が終わってすぐ日本への飛行機に乗りました。

日本では日本語学校を通りながら、大学院進学への準備をしました。プロ野球選手という自分の夢を諦めさせた「投球損傷」の研究計画書を持ち、早稲田大学、東京大学、筑波大学、順天堂大学、国士館大学などを訪ね、先生方に相談したのですが、なぜか‘ここでやってみたい’という気持ちにはならなかったのです。研究に専念することもよいのですが、せっかく日本という国で生活をすることを思うと、都会から離れたところは希望大学から外れました。そしてたどり着いたところが日本体育大学でした。そして現在指導いただいている先生と出会いました。何より“君がやりたい研究を思い存分やってみなさい”とおっしゃってくださったことから、ここで勉強してみたいと考えることになりました。大学院の入試を合格した後は、6か月間通っていた日本語学校をやめて、大学院入学への手続きをしました。次年の4月まで少し時間があったので、韓国語講師のアルバイトをしながらお金をためたり、日本でできた友達と大阪旅行に行ったりしながら、楽しい時間を過ごしました。修士課程では大変苦労をしながらも坂口財団の皆様のおかげで、研究に集中することができ、頑張って研究を進め、修士学位を取得することができました。

取得後、博士課程進学と、義務を果たしていなかった兵役のため母国に戻るかでしばらくの間悩みました。考えた結果、ちょうど海軍士官学校での任用試験にも合格し、海軍士官学

校で生徒たちにスポーツを教えながら兵役を果たす機会を得たので、韓国へ帰りました。韓国で3年間軍人かつ教官として仕事をしながら、再び日本で博士課程に進学し、博士号を習得したい気持ちがますます大きくなりました。それで3年間頑張って士官学校での給料を貯金し、再留学の初期費用を集め、また日本へ来ました。

こうして来日後の自分を振り返ると、後悔することはないですが、日本にいる瞬間、瞬間をさらに充実に過ごせたかについてはっきり‘yes’とは答えられないです。もうすぐ博士課程の最後の3年目の学期が始まります。今までより更なる力を入れて、2010年度から10年間の念願である博士学位を習得できるよう、頑張りたいと思います。

## 2. 奨学生期間中にできしたこと・そして成長・考え

一番成長したところはやはり言葉です。今回の再留学では最初の留学よりさらに安定した2年間を過ごすことができました。何より日本語能力が最初に日本に来た時より良くなり、日本でも韓国で過ごすように言葉の不自由なく過ごせています。日本語を勉強するため、韓国人が多く集まる新大久保には韓国の食材を買いに行くとき以外には行ってないことと、毎日町の看板やテレビで見た分からない単語や漢字を面倒臭がらずに勉強してきたことが、時間が経ち大きな力となったことを感じています。

そして、日本でできた絆が私を成長させたと思います。日本留学が終わってからもずっと互いの安否を問い合わせながら、互いの新たなニュースで喜び、悲しみ、感情を共有できる一生の友達が何人もできました。日本で外国人として過ごすことは、周りに誰がいるかによって、大きく変わることと思います。私は周りに恵まれて、韓国とあまり変わりなく、楽しく生活していましたと、改めて思います。坂口財団で経験した様々なイベントも、日本と人々をさらに深く理解できるきっかけとなりました。特に個人では恐らく行くことがなかった歌舞伎公演から、渋沢史料館と東洋文庫見学、坂口財団の皆さんと交流した秋季1泊研修・交流会も自分の日本生活の宝物になりました。特に研修・交流会で坂口財団の立場ではなく、日本で家庭を支えている1人の生活とその人生話をゆっくり聞けたことがとても良かったのです。

また、オーストリア留学時には思いもしなかったのですが、世界がどんどん近くなっている気がします。今日遠くのヨーロッパで起きたことがすぐ韓国や日本では速報で流れたり、イギリスに住んでいる友達の生活をSNSで見られたり、顔をみて話し、笑ったりできる時代なので、どんどん物理的な距離が関係なくなっている気がします。世界のどこ国の食べ物や物もその国に行かなくてもすぐ手に入れることができ、オーストリア留学時によく飲んだビールを韓国や日本でも簡単に買って楽しめることができたことが当たり前のことになった今をたまに不思議に思うことがあります。

そして時間の経過がとても早いと感じるようになりました。20代の時はあまり意識なく、ただ時間が過ぎることを楽しんでいましたが、最近は時間の速さを感じて、1秒1秒がさらに大事になりました。日本での留学生活を始めてから、今の現在の自分を思い出すとぞっとするほど変わった自分と周りの環境にびっくりします。今までの留学生活は長いレースの2/3時点だと思っています。残りの1/3にたどり着くためにいろんなところで迷ったり、止

まつたりして 2/3 時点を通ってきました。しかし、残りの 1/3 は迷わず、一直線の道を自分のペースで 1 ステップずつ踏んでいく、地味で長いレースになりそうです。自分は 1 人ではなく、いろんな人々の助けと応援がいつも後ろで自分を支えてくれていることに気づき、喜びながら、残りの 1 年の博士課程を充実に過ごしたいと思います。日本での生活が残り 1 年か、それともさらに長く続くかは今の時点では簡単に判断できないと思いますが、今年も来年も、その向こうの時点まで、時には心強い後援者として、特にはあたたかい友人として、私の日本留学生活を支えてくださった坂口財団との絆はいつまでも深くありたいと思います。これからも宜しくお願ひ致します。